

## 15 公安機関のしくみ

## 丸亀の大きな火事

丸亀の大きな火事としては、次の三つがあげられよう。大正十一年一月六日夜、新町の映画館帝國館付近から出火し、同館を全焼、住家十戸が焼け、カマス十二万枚も焼失したという。昭和四年十月二十八日未明、浜町の映画館地球館付近から出火し、同館をはじめ住家二十戸が焼け、三人が負傷した。このときの損害は二十万円といわれた。また同十五年五月には、通町の大阪屋の倉庫が火災にあい、倉庫十むねが焼け、焼失面積三千三百平方メートルに及んだという。倉庫内のウチワについた火がなかなか消えないで、四日間も燃えくすぶったということである。

## 交通安全協会

丸亀署内に、昭和二十五年九月、丸亀交通安全協会が設けられた。交通安全協会は、もともと、自動車運転者の親善団体として、組織されたものであった。そこで、最初は運転者協会といい、また自動車協会といったときもあった。

## 土器川、金倉川のはんらん

土器川も金倉川も、ともに阿讃山脈に源を發して、丸亀平野にはいり、丸亀を東と西から、かかえるようにしながら流れ、瀬戸内海にそそいでいる。土器川は香川県最大の河川で、しばしば風水害によって、決壊はんらんがくらかえされた。それは、明治にはいっても、なお続いたのである。

明治十七年（一八八四）八月二十五日に暴風雨が降り、海岸地帯に津波が押寄せた。この日丸亀地方は豪雨が降り、水害も相当あったが、風の勢いはそれよりもさらに強く、水害よりも風害の方が大きかった。家屋の倒壊が続出し、また浸水した家屋も多く、漁船の沈没、人畜の死傷もあった。

明治二十九年八月三十日、鹿児島方面から近づいた台風は、土佐沖を通過し、紀伊水道から和歌山に上陸、大阪京都の間を横断して、日本海に出た。この台風で、香川県南部の山間地方の雨量は、二七〇・九ミリに達した。丸亀付近の雨量は、九五・三ミリであったが、そこへ、山間部の大雨水が一度に流れてきたため、土器、金倉の両川とも大水となり、かつてない水害をこうむった。

明治三十二年八月二十八日の台風は、それまでにない大型で、とくに風が強かった。風害は沿海部より山野部が激しく、香川県の中央部は被害が最も大きく、丸亀平野はその中心にあたっていた。当時の被害記録によると、県下の河川堤防の決壊十三カ所、延長五百五十五間（九九九メートル）、破損九十カ所、延長千六百三十九間（二九五〇メートル）となっている。この大風水害は、丸亀平野に集中したため、土器川、金倉川ともに、被害は大きかった。

大正元年九月二十一日、朝から大雨が降りしきり、しだいに強風も加わった。しかも、夜にはいっていつそう激

しくなった。阿讃山脈から流れ出した奔流は、たちまち方々の河川にあふれ、水勢はいよいよ急激となり、堤防を決壊してはならんした。このとき、土器川の堤防を破壊した水は、土居町、風袋町、瓦町二帯の、民家の床上にまで浸水した。この被害状況は、その後も長く家屋の壁や土べいに、一・五メートルほどの高さの水跡を残していた。また、飯野でも二カ所の決壊があり、田畑に大きな被害を及ぼした。

大正七年九月十四日の暴風雨で、土器川、金倉川がまたはんらんし、土居、風袋町、瓦町、上金倉、下金倉などでは、家屋の床上浸水したところが多かった。このとき、葭町の正玄寺は避難所となり、たき出しが行なわれた。

## 丸亀平野のかんばつ

水量が少なく、帯川しか持たない讃岐では、水不足を補うため、遠い昔から多くのタメ池を造って、干害に備えてきた。しかし、ひとたび数十日の日照りがつづくと、凶作のうきめをみなければならなかった。このため、丸亀平野の水の争いは、明治以降も、長く尾を引いているほどである。

明治九年（一八七六）この年の夏は、干天が数十日も続き、稲作の収穫が、皆無となってしまった田地が多かった。丸亀平野の村々も、もちろんそのなかに含まれていた。

明治二十六年、二十七年。全国でも雨量の少ない香川県で、三十日以上雨が降らなかった夏が、二年つづいた。この兩年の夏季の雨量は、一〇ミリという、きわめて少ないものであった。とくに、丸亀地方は最悪で、一カ月間にわずかに三ミリという、ひどさであった。各タメ池の水は完全になくなり、土びんに水を入れ、稲の根元にそそいで、枯れるのを防いでいたが、その水さえもなくなった。池の底はひび割れがし、井戸の水はかれて、飲料水にも不自由するありさまで、稲はみな枯死し、それはもう目もあてられない、悲惨な状態であったという。

昭和九年。この年は、五月十三日に雨が降ってからのちは、梅雨期にも雨はとほしく、およそ六十日間日照りがつづいた。七月十三日に降雨があったので、農家は恵みの雨と喜んで、遅れながらもそろって田植えをした。しかし、それからまた、四十八日間の日照りがつづいたので、前後百八日間も、雨が降らなかったことになる。木下義介香川県知事は、気象の変化を起して雨を降らせようと、善通寺山砲隊に実弾射撃を依頼した。各市町村民も、山々の頂上で火を燃やして、雨が降るよう神仏に祈った。

九月一日になって、ようやく坪当り四斗の雨が降って、長い日照りは解消し、人びとは生き返ったような思いをした。しかしこの日照りで、丸亀平野はほとんど無収穫に終わった。

昭和十四年。この年は、苗代づくりの四月下旬から、雨が少なく、農家は苗の育成に苦勞し、大切にしていた貯水を使うよりほかはなかった。六月の梅雨にも全然雨が降らず、七月にはいっても炎天が続いた。田植えは貯水にたより、長い間かかってやっと終えたが、タメ池の水は減る一方であった。

各地で雨ごいは始まり、愛媛県の奥の院の龍神の水をいただいてきて、神前に供え、また大火をたいたり、念仏踊りをして、神に雨が降るよう祈った。こうした祈願も効果がなく、農家は土びん水で、稲の枯れるのを防ぐなど、涙ぐましい情景であった。

八月下旬、稲にとっていちばん大事な穂はらみ期に、恵みの雨が降ったが、きわめて少量で、またまた干天がつづいた。満濃池の引き水も思うようにまわらず、各地のタメ池は底をついてしまい、出量の多い井戸のある区域だけが、なんとか稲作をささえている状態であった。

九月初旬にはじめて雨が降ったが、すでに遅く、稲の収穫にはなんら役にたたなかった。このときの香川県の干ばつの被害は、実に二万二千ヘクタールに及び、丸亀地方はほとんどが収穫皆無であった。

### 南海大地震

太平洋戦争が終って間もない、昭和二十一年十二月二十一日未明、南海道一帯にわたって、激しい地震が起った。瀬戸内海をはさんだ本州、四国沿岸はとくに被害が大きかった。丸亀市の被害は次のようである。

死者	四人
負傷者	一人
家屋全壊	一三五戸
同 大破	三三二戸
同 中小破	三五五戸
損害額	一五、六二八、〇〇〇円